

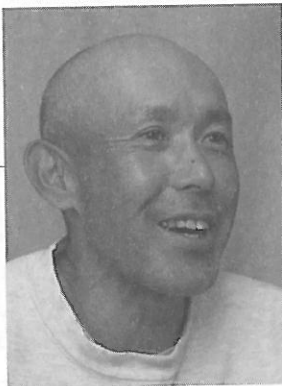
現場  
からの  
声

“高高”球児であるプライド持ち  
新しき中にも古き良き校風を

高崎高

境原尚樹 監督

さかいばら・なおき／1963年10月9日生まれ。東京都出身。高崎高では3年春に甲子園に出場。七番・中堅で4打数2安打1打点を記録。卒業後は群馬大で準硬式野球を経験。2年間の小学校勤務を経て沼田高に赴任し7年間監督。榛名高でも11年間監督を務めた。06年に母校に赴任し、07年から監督。今秋の関東大会で4強に導いた。体育科教諭。



114年の歴史とともに  
世界で活躍する人材を

本校は1897年に創立し、114年目を迎えます。高崎工と区別するため、群馬県内では「高高(タカタカ)」の呼び名で親しまれています。本校OBから福田勉、中曽根康弘と2名の総理大臣を輩出していますし、学校行事として毎年行われる講演会でも文部科学大臣など日本全国で活

躍されている方が来られます。同窓会にも企業のトップの方々が集まりますし、皆さん卒業後も高高のOBであることを大事にしています。私自身もOBですが、高高を出るとするのは県内では大きいですね。

伝統について、私から野球部の生徒に話をすることはありませんが、この学校を受験するときから高高生としての自覚を持っていると思います。今の子は福田さんや中曽根さん



長い歴史を誇る県有数の進学校。センバツ出場となれば1981年以降の快挙となる

といわれても想像もつかないでしょうが、普段、教室にいるときから「君たちは世界で活躍する人材だ」という話をされますし、過去にそういう方が出ているというプライドと誇りは十分持っていると思います。

野球部は、私が高校3年の春にセンバツに出場することができましたが、それ以降は甲子園から遠ざかっています。ただ、私が卒業してから6年前に赴任するまでの間も、だいたい9年ごとに県4強、4、5年に一度は県8強に進出していました。乗ったときに力を出して上がってくるのが特徴。県内でライバルといわれる前橋高に比べると上位進出は少ないですが、ずっと低迷しているという感じはありませんでした。

私の前任校は榛名高ですが、高高とは家庭環境を含めて、育ってきた環境が違います。私が赴任したときは野球部員もほとんどおらず、グラウンドもコケが生えているような状態。校門の前に立って、「野球やろうよ」と勧誘したり、運動部にいなからあまり活動していない子らにも声をかけたりして10数名集めました。ところが、練習開始の16時には集まらず、17時近くになってやっと集まってくる。集中力はまったくなく、練習しても10～15分でイヤになってしまう。たまにやってもらう練習試合でも、大敗すればイヤになって翌日は来ないので、家に電話をしたり、どこにいるか探して連れて来たりもしました。海やスキー、ボウリングに連れて行くなどイベントもたくさんやり、「野球部にいると楽しいよ」と思わせるようにもしました。

そこからスタートした野球部も夏の大会で桐生第一高に善戦したり、地域の少年野球向けに野球教室を開催するなどして徐々に認知されるようになり、なんとか県で8強に入るところまで来ました。本当にさまざまなことがありましたが、このときにいろいろな経験をして引き出しが増えたことが今の指導にも何らかの



チームは自主性を重んじ、秋の群馬県大会では準優勝。関東大会でもベスト4に入った

影響を与えていると思います。

高高の監督に就任して5年目ですが、監督になって2、3年は自分のスタイルをすべて導入しようとしていました。私のスタイルとは「高校野球をやろう」ということ。高校野球精神というか魂を持ち、時間を大事にする、何事も全力でやる、礼儀、あいさつなどマナーをしっかりやる。母校に来て、まずはその形づ

くりをしようとして私が率先垂範でやり、「こうしよう、こうやろう」と指示をしていました。それである程度の形ができたのは良かったのですが、逆に生徒たちが指示を待つ、受け身になってしまったようにも感じました。それがマイナスになり力が出せなかったと思うところもあり、ここ数年は高高に合ったやり方があるはずだし、それを見つけていこう

と考えるようになりました。

榛名高の子たちは自分の力を出す方法が分からない。こちらが言った言葉の6、7割できたらOKでした。バットを振るのも100本振ってほしいときは5万回と言わなければいけない。それもあって、常に120%を求めています。高高に来た当初もそれを求めていたんですが、この子は100%言葉が浸透しやすいので、5万回と言ったら本当に5万回やるんです(笑)。そこが大きな違いですね。言葉の使い方や伝え方などが同じではいけない。そう感じてからは徐々に変えていきました。

じっくりと熟成を待ち  
いざ、2012年の春へ

いろいろと変えていく過程で考えたのは、「なぜこれだけの歴史があって、自分たちの代だけが甲子園に行けたのか」ということでした。自分が2年の夏まではOBの方が監督をやっていて、ガチガチにやっていた。それが、学校の事情で新チームからは軟式の経験が少しあるという



チームに合った練習法を見つけることが重要だと指揮官は語る